

小児の股関節痛（上）

東北海道病院

副院長 石崎 仁英

高い熱が出ない

はっきりとした外傷がないのに、小児があしの付け根を痛がって歩かないか、片足を引かずるときは、次のような病気である可能性があります。

単純性股関節炎

このような状態の時、一番可能性の高い病気です。たいていの子供は、太ももの前面あるいは膝が痛いと訴えます。

特徴は、高い熱がないこと、わんわん泣きつづけるほどの強い痛みでないこと、痛みが一日中ずっと続くことです。

膝は動かしても痛くないのに、股関節は動かすと痛くて、動く範囲も制限されます。レントゲンには異常がありません。超音波検査で関節に水がたまっていることがあります。

原因ははっきりしないことが多いのですが、前日運動などで使いすぎたときや、軽い力ぜの後などに続いて起こることがあります。治療は、安静が基本です。外に出さない、走らせない、トイレもだっこして連れて行く、風呂に入れない、といった程度の注意で、普通は3~5日で良くなります。症状が強い場合は数日間入院して、ベッド上で足を引っ張っておく治療をすることもあります。障害は残りません。とくに繰り返しやすいということはありません。

全く歩けなく

化膿性股関節炎

頻度の高い病気ではありませんが、発見と治療を非常に急ぐ必要がある、という意味で重要です。

高い熱が出て、非常に痛がります。ふつう全く歩けません。検査で、股関節に膿がたまっていることが証明されれば、関節切開・排膿などの緊急手術が必要になることがあります。関節鏡で関節内を十分洗浄してチューブを入れておく治療もあります。

手遅れになると、関節がこわれて、動きが悪くなる心配があります。

血管がつまって

ペルテス病

「ペルテス」というのは、この病気を発見した医者の名前です。大腿骨一番上の所は、ひとの頭のような丸い形をしているので、「骨頭（こっとう）」と呼びます。大腿骨頭の部分に行く血管がつまって血が通わなくなると、この部分の形がくずれて痛みが出ます。原

因は分かっていません。

初めのうちは、単純性股関節炎と区別が付きません。レントゲンの変化は、早くて 2 週間くらい、遅くても 2 カ月くらいで出ます。診断の確定に MRI は非常に役に立ちます。

治療は医師によって若干意見が分かれますが、年齢・病気の程度・肥満度・性格などを考慮して総合的に決めます。

急性型と慢性型

大腿骨頭すべり症

急性型と慢性型があります。

痛みの程度は、急性型では非常に強い痛みがあります。熱はありません。

慢性型では、中程度の痛みから、ほとんど痛くない程度までさまざまです。大腿骨頭の成長軟骨のところで骨がずれて変形します。原因はわかっていません。ホルモン異常が関係している場合もあります。30%のひとでは反対側にも起きます。

診断はレントゲン検査と、軽い場合は MRI できめます。

治療法については医師によっていろいろな考え方がありますが、基本的には急性型は、整復してピン固定手術、慢性型は整復せずにピン固定手術し、さらに追加手術をする場合があります。

その他に、心因性股関節炎・リウマチ熱、若年性股関節リウマチ、骨腫瘍、白血病などを念頭に置いて診断と治療を進める必要があります。

(2004 年 11 月 1 日 釧路新聞掲載)